

あの日のこけし

小川 美香子（福島県白河市・二十四歳）

私が生まれて初めてこけしに顔を描いたのは、まだ小学校に上がる前だったね。

物心ついたときから、おじいちゃんは家に自分で作った工房の中で、こけしの木を削っては顔を描いていた。じいちゃんのこけしなんて大したものじゃないと自分で言っていたけれど、私は、お店で売っているこけしよりもむしろ丁寧に、柔らかな表情を持つおじいちゃんのこけしが大好きだったよ。

そんなおじいちゃんの影響もあって、家族で旅行をした時、こけし工房でこけしを描く体験をしようということになった。

おねえちゃんは丁寧に器用だったから、きちんと目や口の大きさを考えながら慎重に描き始めた。なのに、私は向こう見ずの後先考えない性格で、何も考えずこけしに大きな黒丸を、ためらいもせずに描いた。一瞬親が息をのんで、おいおいと苦笑いをされて、それで初めて自分でも焦ったの。

けれど、そのこけしをおじいちゃんに見せた時、おじいちゃんはものすごく満面の笑みを浮かべた。

「いい顔してるなあ、どんな一流のこけし職人でも、こんなに生き生きとしたこけしは描けないよ。いいや、みかちゃんだって一生に一度しかこんな素直な大作は描けないかもしれないな。宝物だなあ、これは。」

何とも言えない嬉しさと、感動がこみ上げてきたことを、私は鮮明に覚えているよ。私は、何も考えずにあのこけしを描いた。私の心の中から自然に出てきた、私らしい不格好な命の源を、おじいちゃんは全て受け止めて、私を愛してくれていたんだね。

私が大学三年の時に天国へ行ってしまったおじいちゃん。心筋梗塞で、もう意識はないのに、必死で呼びかける私の声に最終にかすかに、心臓を動かしてくれたおじいちゃん。

今でも私は、あの時と何も変わらない、向こう見ずで思い切りだけで歩いてる、危なっかしい人だよ。でもね、おじいちゃんが、そんな私を愛してくれるって分かるから、前を向いていけるんだ。

でもいつかは、おじいちゃんみたいに、かわいいこけしも描きたいな。私がそっちに行ったら、描き方を教えてね。